

高校3年生のST(生徒理解の基本調査)による分析

藤井佑介 (九州大学大学院)

柳田泰典 (長崎大学教育学部)

1. 研究目的

発達段階において青年期にあたる生徒達は他人に自分を分かってもらえない経験から、本来の自分を隠そうとしたり、故意に相手を遠ざけたりすることがある(2004 菊池)。また、菊池によると生徒達は話し相手が自分の気持ちをくみ取ってくれることを期待しているはずなのに、逆にふさぎこんで自分を閉ざし、そんな自分に腹立たしさを感じたりすることがあるとしている。そのような発達段階にある生徒達とかわり合いを持つ教師にとって必要なのは、生徒のより内面的な部分へ関心を向け、理解しあう関係を作りあうことである。

そこで本調査では、まず第1に教師が生徒がどのような問題や悩みを持っているかを把握すること、第2にそれに伴った個々人に対する適切な指導・援助を行うことを目的としている。

2. 方法

1. 回答者

長崎県内の公立高校に所属する3年生である男子1名(以下A)と女子1名(以下B)の計2名である。調査年は2008年。

2. 内容

調査は「S→T(生徒理解の基本調査)」(教育臨床研究所)を用いて行った。「S→T」は主に家庭や学校生活に関する内容で単一選択式の139問、主に悩みに関する内容で複数選択式の13問、具体的な内容を記述するための自由記述欄によって構成されている。

また、本調査は「第1傾向」・「第2傾向」・「検査尺度」・「悩みに関する調査」・「その他」の5つの項目によって構成されている。

(1) 「第1傾向」

「第1傾向」とは、自分の進んでいく方向にいきづまりを感じ、そしてその原因が自分自身にあると考えたり、自分の力ではどうにもならないと考えて、自分自身を否定しようとする傾向のことである。また、「第1傾向」を測定する尺度はISであり、

I Sは自己違和感・不安感・自己否定感の3つの尺度によって構成される。

1) 自己違和感

この尺度は自分の考えや行動が、自分の気持ちと食い違っている感じを示したものである。

2) 不安感

この尺度は自分の進んでいこうと思う方向に、いきづまりを感じ、不安になっている状態を示したものである。

3) 自己否定感

この尺度は自分に自信を失い、自分で自分を否定しようとする気持ちを示している。

(2)「第2傾向」

「第2傾向」とは、自分の周りに問題を感じ、それに負けて後退していく恐れのある傾向である。その生徒が感じている問題が、周りから理解されなかった時は、学習放棄・怠学・家出・非行などの方向へ後退していく可能性があるといえる。また、「第2傾向」を測定する尺度はE Sであり、E Sは家庭不適応感・学級不適応感・先生不適応感・学校不適応感・抵抗力の5つの尺度によって構成される。

1) 家庭不適応感

この尺度は生徒が家庭において気持ちよく生活できているかどうかを示したものである。

2) 学級不適応感

この尺度は生徒が学級において受け入れられていると感じているかどうかを示したものである。

3) 先生不適応感

この尺度は教師に対して不適応感を持っているかを示したものである。不適応感を持っている場合は小学校以来の長い経験の中で先生という概念に対して、みぞや敵意を持っている場合が多い。

4) 学校不適応感

この尺度は学校で気持ちよく過ごせているかどうかを示したものである。不適応感がある場合、充実した学校生活を送れていないと感じている傾向がある。クラスの生徒との関係、先生との関係、教育制度や学習形態など、いろいろなことが原因になって出てくる。

5) 抵抗力

この尺度は感じた問題に負けないで取り組んでいく力を示したものである。問題を感じた時に、それに負けてしまったり、学習から逃避したり、好ましくない環境に引きずられやすい傾向である。

(3) 検証尺度

この尺度は「学校生活が真剣かどうか」を生徒自身が自己評価する項目と、本調査に対して「まじめに回答したかどうか」をみる項目より成り立っている。

(4) 悩みに関する調査

生徒がどのような悩みを意識的に感じているかを見るものである。主に勉学上の悩み、将来についての悩み、性格についての悩み、能力についての悩み、容姿についての悩み、健康についての悩み、交友上の悩み、異性や性についての悩み、家庭についての悩み、学校生活上の悩み、人生についての悩み、不満に思っていることの12項目の調査と、悩みの相談に関して2項目の調査、友人名を記述式で回答する調査から構成されている。

(5) その他

1) 成績に対する見方

この尺度は生徒が自分の成績をどのように見ているのかを示している。

2) 学習に対する態度

この尺度は学習に打ち込んでいるか生徒が自己評価したものである。

3) 頭に対する自信・判断の正確さ・根気強さの傾向

これら3つの尺度は自分の頭に対する自信や、意志の強さを示したものである。これらの得点が低いほど一般に意志が弱いといわれるような行動をとったり、人のいいなりに動きやすいといった傾向が現れる。

4) 学校生活に対する真剣さ・正義感の傾向・責任感の傾向・公共心の傾向

これら4つの得点が低いほど、学校でできまりのないような行動をしやすい傾向にあるということを測定する尺度である。

5) 協調の傾向・やさしさの傾向・寛容の傾向

これら3つの項目の得点が低い方へ片よるほど反抗的だと言えことを測定する尺度である。

6) 体に対する自信・人おじしな傾向・気にしない傾向

これらの3つの項目に関しては得点が高い方へ片よるほど、気が弱く、恥ずかしがりやで、消極的だといわれる行動をとる傾向があるといえる。また、あまり自分の気持ちや感じていることを、外に出さない傾向がある。

7) 内圧傾向

この項目は得点が高いほど内圧傾向が強いと言え、ひっこみ思案で、行動を内に抑える傾向がある。また数値が低いほど、感じたことを行動に率直に表現しやすい傾向を持っているといえる

3. 結果

結果の処理については「S→T、教師用／結果の見方と利用の手引」（教育臨床研究所）を用いて以下のような結果を得た。

Table 1 は回答者 A・B の結果をまとめたものである。

Table 1 : A と B の結果

項 目	A の得点	B の得点
I S	31	20
1.自己違和感	6	6
2.不安感	10	9
3.自己否定	9	8
E S	44	49
4.家庭不適応	10	11
5.学級不適応感	7	8
6.先生不適応感	10	12
7.学校不適応感	14	16
8.抵抗力	50	55
9.よりあまく、あるいは よりきびしく書いたおそれ	7	10
10.まじめに書かなかった おそれ	0	0
11.成績に対する見方	45	0
12.学習に対する態度	45	45
13.頭に対する自信	6	8
14.判断の正確さ	6	6
15.根気強さの傾向	8	6
16.学校生活に対する 真剣さ	6	11
17.正義感の傾向	8	11
18.責任感の傾向	12	11
19.公共心	10	12
20.協調の傾向	12	12
21.やさしさの傾向	12	12
22.寛容の傾向	14	10
23.体に対する自信	14	5
24.人おじしない傾向	8	7
25.気にしない傾向	0	10
26.内圧傾向	22	22

- ③ 学級不適応感の得点は11であった。(中央値9～10)
- ④ 先生不適応感の得点は12であった。(中央値7～8)
- ⑤ 学校不適応感の得点は16であった。(中央値13～14)
- ⑥ 抵抗力の得点は55であった。(中央値50～52)

以上の結果より、自分のまわりに問題を感じ、それに負け、学習放棄、怠学、家出、非行などの方向へ後退していく傾向は無いことがわかった。

3) 検証尺度

- ① 「よりあまく、あるいはよりきびしく書いたおそれ」の得点は10であった。(中央値8～9)
- ② 「まじめに書かなかったおそれ」の得点は0であった。
以上の結果より、本調査に対して真剣に取り組んだということがわかった。

4) 悩みに関する調査

① 勉学上の悩み

- ア. 成績がわるいので悩んでいる。
- イ. 思うように成績がとれないので悩んでいる。
- ウ. わからない科目があるので悩んでいる。
- エ. 勉強の仕方がわからないので悩んでいる。
- オ. 勉強が思い通りにゆかないので悩んでいる。
- カ. 受験勉強のことで悩んでいる。

② 将来についての悩み

- ア. 進学したいのだが、成績がよくないので悩んでいる。
- イ. 今の学力で、志望校に入れるかどうかかわからないので悩んでいる。
- ウ. 進学して、うまくやっていけるかどうかで悩んでいる。
- エ. 将来、どのような方向に進んでゆけばよいかわからないので悩んでいる。

以上の結果より、自分の学力や受験や進学することに対して大きな悩みをもっていることがわかった。

③ 性格についての悩み

- ア. 人前で、うまくしゃべれないので悩んでいる。

④ 容姿についての悩み

- ア. スタイルがよくないので悩んでいる。

以上の結果より、自分の容姿に悩みを持っていることがわかった。

5) その他

- ⑤ 根気強さの傾向の得点は8であった。(中央値5～6)

以上の結果より、学力に対する自信は少しないが、根気は強いということがわかった。

- ⑥ 学校生活に対する真剣さの得点は6であった。(中央値7)

- ⑦ 正義感の傾向の得点は8であった。(中央値8～9)

- ⑧ 責任感の傾向の得点は12であった。(中央値7～8)

- ⑨ 公共心の傾向の得点は10であった。(中央値6～7)

以上の結果より、学校生活に関してはやや真剣ではないが、正義感や責任感や公共心はとても強いということがわかった。

- ⑩ 協調の傾向の得点は12であった。(中央値9～10)

- ⑪ やさしさの傾向の得点は12であった。(中央値8～9)

- ⑫ 寛容の傾向の得点は14であった。(中央値8～9)

以上の結果より、3つとも得点が中央値を大きく上回っているということがわかった。つまり、協調ややさしさや寛容の傾向が特に強いということがわかった。

- ⑬ 体に対する自信の得点は14であった。(中央値6～7)

- ⑭ 人おじしない傾向の得点は8であった。(中央値6～7)

- ⑮ 気にしない傾向の得点は0であった。(中央値6)

以上の結果より、体に対する自信はあまりなく、やや人おじしない傾向があり、あまり気にしない性格であることがわかった。つまり積極的であり、自分の気持ちや感じていることを外に出しやすい傾向があることがわかった。

- ⑯ 内圧傾向の得点は22であった。(中央値20～21)

以上の結果より、特に感じたことを行動に率直に表現する傾向はないということがわかった。

(2) 回答者B(高校3年生 女子)

1) 「第1傾向」

- ① ISの得点は28であった。(中央値29～30)

- ② 自己違和感の得点は6であった。(中央値7～8)

- ③ 不安感の得点は9であった。(中央値7～8)

- ④ 自己否定感の得点は8であった。(中央値8～9)

以上の結果より、やや自分の進んでいく方向にいきづまりを感じているということがわかった。

2) 「第2傾向」

- ① ESの得点は49であった。(中央値44～45)

- ② 家庭不適応感の得点は11であった。(中央値9)

(1) 回答者 A(高校3年生 男子)

1) 「第一傾向」

- ① I Sの得点は31であった。(中央値31～32)
- ② 自己違和感の得点は6であった。(中央値7～8)
- ③ 不安感の得点は10であった。(中央値7～8)
- ④ 自己否定感の得点は9であった。(中央値9～10)

以上の結果より、とくに自分の進んでいく方向にいきづまりを感じたりしていないということがわかった。

2) 「第2傾向」

- ① E Sの得点は44であった。(中央値38～39)
- ② 家庭不適応感の得点は10であった。(中央値9)
- ③ 学級不適応感の得点は7であった。(中央値9～10)
- ④ 先生不適応感の得点は10であった。(中央値7～8)
- ⑤ 学校不適応感の得点は14であった。(中央値12～13)
- ⑥ 抵抗力の得点は50であった。(中央値42)

以上の結果より、自分のまわりに問題を感じ、それに負け、学習放棄、怠学、家出、非行などの方向へ後退していく傾向はないことがわかった。

3) 検証尺度

- ① 「よりあまく、あるいはよりきびしく書いたおそれ」の得点は7であった。(中央値6～7)
- ② 「まじめに書かなかったおそれ」の得点は0であった。

以上の結果より、本調査に対して真剣に取り組んだということがわかった。

4) 悩みに関する調査

将来についての悩みに関して、進学後にうまくやっていけるかどうかで悩んでいることがわかった。

5) その他

- ① 成績に対する見方の得点は45であった。(中央値30～45)
- ② 学習に対する態度の得点は45であった。(中央値30～45)

以上の結果より、自分の成績は平均的であると考えているということがわかった。

- ③ 頭に対する自信の得点は6であった。(中央値8～9)
- ④ 判断の正確さの得点は6であった。(中央値7～8)

- ① 成績に対する見方の得点は0であった。(中央値30～45)
- ② 学習に対する態度の得点は45であった。(中央値30～45)
以上の結果より、自分の成績に劣等感を感じているということがわかった。
- ③ 頭に対する自信の得点は8であった。(中央値7～8)
- ④ 判断の正確さの得点は6であった。(中央値7～8)
- ⑤ 根気強さの傾向の得点は6であった。(中央値6～7)
以上の結果より、人のいいなりになりにくい傾向であることがわかった。
- ⑥ 学校生活に対する真剣さの得点は11であった。(中央値10)
- ⑦ 正義感の傾向の得点は11であった。(中央値9～10)
- ⑧ 責任感の傾向の得点は11であった。(中央値9～10)
- ⑨ 公共心の傾向の得点は12であった。(中央値8～9)
以上の結果より、学校生活においてきまりを守った行動をし、正義感や責任感や公共心も強いということがわかった。
- ⑩ 協調の傾向の得点は12であった。(中央値11～12)
- ⑪ やさしさの傾向の得点は12であった。(中央値11～12)
- ⑫ 寛容の傾向の得点は10であった。(中央値9～10)
以上の結果より、協調ややさしさや寛容の傾向はほぼ中央値であるということがわかった。
- ⑬ 体に対する自信の得点は5であった。(中央値7～8)
- ⑭ 人おじしい傾向の得点は7であった。(中央値8～9)
- ⑮ 気にしない傾向の得点は10であった。(中央値7～8)
以上の結果より、体に対する自信がなく、やや人おじする傾向があり、気にしやすい性格であることがわかった。つまり消極的であり、自分の気持ちや感じていることを外に出しにくい傾向があることがわかった。
- ⑯ 内圧傾向の得点は22であった。(中央値22～23)
以上の結果より、特に感じたことを行動に率直に表現する傾向はないということがわかった。

4. 考察

本研究では、教師が生徒がどのような問題や悩みを持っているかを把握することによって、それに伴った個々人に対する適切な指導・援助を行うことを目的とした。

(1) 回答者A (高校3年生 男子)

検証尺度の結果より、Aは本調査に対して真剣に答えているということがわかる。以下に適切な指導・援助のあり方を考えていくこととする。

第1傾向、第2傾向の結果よりAは自分の進む方向にいきづまりを感じていることもなく、自分のまわりに問題を感じ、それに負け、学習放棄、怠学、

家出、非行などの方向へ後退していく傾向もないことがわかった。その他の結果より、学校生活に関してはやや真剣ではないが、正義感や責任感や公共心はとても強く、協調性も高いということがわかった。また、人おじしない傾向があり、あまり気にしない性格であり、何事にも積極的に自分の気持ちや感じていることを外に出しやすい傾向があることがわかった。

Aは現在、高校3年生で進学高校に所属していることから、厳しい受験体制に身を置いているが、自分の成績の見方などの結果より、受験や進路に関しては大きな悩みはないことがわかった。ただし、悩みに関する調査より進学してうまくやっっていけるかどうか悩んでいると答えていることから、進学後に対する悩みを持っていることがわかった。

以上のことから、適切な指導・援助について考えることとする。進路後の悩みに関する指導・援助は、鶴田(2001)によると、大学入学期を「新しい生活にうまく対応できない場合には、過去になじんだ習慣や友人関係への逃避が生じやすい時期」であるとし、進路指導が大事であるとしていることより、進学後も教師によるカウンセリング等が必要であるといえる。在学中から進路後のことも心がけ、不安を取り除くような関わり方や進路指導をし、進学後も相談にのれるような環境を提供するといった丁寧な指導・援助が必要であるといえる。

(2) 回答者B (高校3年生 女子)

検証尺度の結果より、Bは本調査に対して真剣に答えているということがわかる。以下に適切な指導・援助のあり方を考えていくこととする。

第1傾向の結果より、Bは現在、自分の進む方向にややいきづまりを感じているということがわかった。その大きな原因は成績に対する見方や悩みに関する調査の勉学上の悩みと将来に対する悩みから、成績に伴った進路や受験が関係していると考えられる。Bは高校3年生であり、また所属している高校が進学高校であるので、受験体制が厳しい環境の中で、自分の成績に自信がないBにとっては将来を考えたり、進学するための受験はとても重圧の大きいものであると考えられる。また進学してうまくやっっていけるかどうか悩んでいると答えていることから、希望どおり進学したとしても、その後の環境の変化にうまく対応していけるかといった心配もあると考えられる。しかし、Bの場合、第2傾向の結果から自分の成績が思うようにならなかったり、進路をどうしてよいかわからなくても、学習放棄・怠学・家出・非行をするおそれはないと考えられる。

また、Bは体に対する自信の傾向や人おじしない傾向の結果、悩みに関する調査の正確についての悩みと容姿についての悩みより、人前でうまく話せない性格であることや自分の容姿に対しても悩みをもっていることがわかった。

以上のことから、適切な指導・援助について考えることにする。上記にも述べたようにBにとって行きづまりの主な原因は成績・受験と進学後にあるといえる。成績・受験に関しては、Bは自分の成績が良いと感じてなく、希望の進路へ進めるかどうか悩んでいることから、将来や進路に関する面談等を十分に行い、勉学や将来に対する不安を取り除くような関わりが必要だと考えられる。Bが納得いくような進路や成績にあった進路を紹介するなど、十分に話し合う関係を持ち、Bの進路と一緒に考えていくと同時に勉学に集中できるような環境づくりをするといった援助が必要といえる。また進路後の悩みに関する指導・援助は、鶴田（2001）によると、大学入学期を「新しい生活にうまく対応できない場合には、過去になじんだ習慣や友人関係への逃避が生じやすい時期」であるとし、進路指導が大事であるとしていることより、進学後も教師によるカウンセリング等が必要であるといえる。在学中から進路後のことも心がけ、不安を取り除くような関わり方や進路指導をし、進学後も相談にのれるような環境を提供するといった丁寧な指導・援助が必要であるといえる。

また、Bは自分の体や性格に対する悩みも持っていることがわかった。これらの悩みに関しては、悩みに関する調査の結果より、特に本人も重く悩んではないと考えられるが、日頃から注意を向け、すぐに相談に乗れるような環境を整えておく必要があると考えられる。

参考文献

- ① 菊池武烈「思春期・青年期と向き合う人のための心理学」中央法規 2004p92
- ② 鶴田和美「学生のための心理臨床」培風館 2001 p2-p11